

な か ま

発行

佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025
佐倉市鐺木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ	健康は最大の宝	山崎 衡良	君が代のルーツ	神取 秀夫
3 ページ	太公望	佐藤 寛	安曇野の方言	宮本 定雄

ある大先輩のこと

安 田 齊 治

彼との出会いは、私がまだ学生時代で、子供たちが安心して楽しめる場としての里山を、奉仕活動で造成したときでした。

彼とは多くの友人を含めお付き合いをさせて頂きましたが、誰からも敬愛と信頼を得ており、文学にも造詣が深くロマンに富んだ人でもありました。

彼のすごい点は、七十八歳の高齢時に出会った一基の庚申塔から、不思議な魅力と息吹きの衝撃を受け、書籍を漁り、仏教事典を座右に梵字を学び、関東一円の庚申塔を尋ね歩き、その研究結果を纏めあげたことです。

平成四年二月には手作りの『庚申通信』第一号を友人・知人に郵送し、以後毎月継続し、平成八年十月の第五十七号で完結させました。腰痛持ちの彼が細い一本の杖を頼りに一都六県を一人で探索し、纏めあげた情熱とその充実した内容には、唯々敬服するばかりでした。

『庚申通信』が完結した後『庚申行脚こぼればなし』を書き続けていました。これの最終号は平成十三年八月で、この号の巻頭に「ぐうたら男の人生回顧」と題した文が記されています。これを読んだとき、私は何か嫌な予感に胸が塞がるような思いがしてなりませんでした。その一文をご紹介します。

夜光虫の青色い光を浴びながら 深夜の海を泳ぎ回ったこともあった。

喘ぎながら登ってきた山頂で 雲海が消えゆく一瞬 大宇宙を感じとったこともあった。

試行錯誤の濃霧の中を 迷い続けてきた幾年月もあった。

あと三年で九十五の峠を迎える。そこに向かって 徐かに歩いていこう。

峠の向こうが 美しい花園であろうが 炎熱渦巻く砂漠であろうが ひたすらに 静かに歩いて行こう。

私はすぐに電話をかけたが、「昨日も十四回目の講演を務めた。県の高齢者百人の匠に選定されたよ」との元気な声が返り安心しました。

しかし、彼はその二カ月後の十月に、脳梗塞のため、突然霊の世界に旅立ってしまった。私は今でも彼が何となく死を予感していたのではないかと思っています。

彼は七十八歳という高齢で庚申塔の研究に取り組み、その結果を纏めました。私はまだ七十一歳です。この二月の佐倉市民カレッジ（歴史コース）卒業時に提出した研究レポートの内容をより充実すべく、彼の足元にも及びませんが、追録版を纏めようと思っております。

（編集委員）

健康は最大の宝

私の最大の関心事は「健康」であり、最大の宝でもある。釜石市の下河原孝氏（百一歳）は全日本マスターズ陸上大会やり投げ百歳以上の部で十二・四二㍓を投げ世界新記録を作ったという。毎日ウォーキング四十分と腕立て伏せ二十回続けているそうである（朝日新聞 H19・10・27）。

私は自分で決めた健康維持の為に日課を必ず実行することが肝要であると考える。

一、早寝早起き病知らず
子供の頃、父に言われたことである。朝四〜五時起床、午後八〜九時就寝としている。二、毎日頭と身体を使う
手頃な仏典、俳句等の著書を読み、考え、実行してみる。

「古人の糟魄、聖人の道の本旨は言語。文章によって人に伝えられない。書物にあるものはその粕ばかりである。…新潮辞典」ともいうので、せ

めて先学の歩いた道を実際に歩いて道すがら考える方法もあると思ひ実行している。

平成十九年盛夏には道元禅師が京都から福井県の永平寺に行かれた旧道を山、峠を越え八日間二百五十㍓歩いた。四国の八十八ヶ寺の歩き遍路、新四国八十八ヶ寺の御府内八十八ヶ寺（東京）、吉橋大師（八千代市）、千葉寺十善講等も歩いて参拝してきた。

芭蕉の足跡を辿るため、江東区常磐の芭蕉記念館から秋田県象潟の蚶満寺までも歩いた。

ウォーキングは三十三歳からの日課である。七十三歳から三年間は毎日三万歩をやり通そうと目標を決め、毎日の食事管理のための食材と併せ記録している。勿論、苦しいこともあるが楽しくもある。

御陰様でここ五年間は歯科医以外病院に行っていない。

（井野 山崎 衡良）

君が代のルーツ

読人不知

初句の「君が代」が「我が君」となっている点が異なるものです。

私も今回の企画展示のボランティア参加で、君が代のルーツをはじめ目にしました。このルーツについては、ご来場の中高年の皆様の関心が特に高かったようで、私達ボランティアになにかと多くの質問がありました。

なお、古今和歌集は、古今の和歌を集めた最初の勅撰和歌集で、醍醐天皇の勅により西暦九〇一年〜九二三年に成立したとされています。

現在から千年以上も昔の平安時代に、君が代のルーツなるものが詠まれていたとは、感慨深いものがありました。

（中志津 神取 秀夫）

学校行事などでの君が代斉唱について、時折りトラブルなどの新聞記事をみかけます。また、平成十九年十二月号の『なかま』に「君が代で想うこと」が掲載されていました。国歌のあり方を考えてゆく上で、君が代のルーツを知ること、君が代が意味のないことではないと思ひ、最近の見聞をもとに駄文にまとめしてみました。

国立歴史民俗博物館の企画展示「長岡京遷都」（平成十九年十月〜十二月）の漢詩から和歌へのコーナーで、古今和歌集（歴博所蔵の俊成本）の君が代のルーツといわれる和歌が書かれているページが展示されていました。

当該箇所は、和歌集の賀歌（お祝いの歌）の中の一首、「我が君は千世にやちよにさざれ石のいわおとなりてこけのむすまで」



太公望

釣りをする人の事を、太公望と言ったりしますが、これは中国の文王と呂尚の故事から出ているのです。

周の文王がある時獵に出ようととして、吉凶を占ったところ「獲物は竜でも蛇でも虎でもひぐまでもない。天下を制する王様の手助けをしてくれる人物と会うだろう」という卦が出ました。

それから文王が獵に出かけると、果たして渭水の北岸で釣りをしている呂尚に出会いいろいろと話をしている内に秀れた人物である事が分かりました。

文王は大いに喜んで「太公君を望むや久し（私の父も、あなたのような人が出て来るのを、久しく待ち望んでいたのです）」と言って、自分の車に乗せて帰りました。

この文王の言葉から、呂尚の事を、太公望と呼ぶようになり

ました。

この話は、司馬遷の書いた『史記』に載っていますが、司馬遷は、文王と呂尚が結ばれた経緯については、他にも二つの話を紹介していますから、どれが本当なのは、定かではありません。

併し占いのからんだこの話が、二人の出会いとしては最もドラマチックだったので、一番有名になり、やがては釣りをする人の事も、太公望と言うようになったのでしよう。その後呂尚は文王を良く助け、文王も善政を布いて、やがて周王朝が栄える基礎を築きました。

川柳にも「釣れますかなどと文王そばへ寄り」という句があります。呂尚程の大人物を見事に釣りあげた文王こそ、実は最高の釣り師だったのかも知れません。

(表町 佐藤 寛)



安曇野の方言

信州は至る所観光地で、高地や安曇野方面へ行く人がだんトツ。そこで安曇野でも広く使われている方言百近くある中で、主なものをご紹介します。これさえ完全にマスターすれば、現地の人との世間話に花咲くこと請け合い。

ようさま「夜間／どべた」
泥深き田／よんべな「昨夜／けみや」納屋／をかた「妻／おっさま」叔父さま／にかっこ「赤子／ぐざる」叱る／げーろ「蛙／どんびき」大きい蛙／やたらに「みだりに／あづきみ」あぐら／ぐず「のろま／ずく」やる気／うんら「奴等／あばね」さようなら／このがる「頭を下げ低い姿勢になる／やぶせつたい」退屈または邪魔そう／あばされる「ふざける／あんじゃねえ」心配いらぬ／あだじゃねえ「面倒だね／おてしょ」小皿／えんで、えべや「歩いて、

行こうや／おぞい「古くさい／かまける」愚痴を零す／きぼつくり「恋人／ごた」冗談／がった「悪戯／さんだす」差し出す／ぶすつら「不平顔／みやましい、またはまたえ」丁寧／のて「いきなり／できない」体がだるい／なつちよした「どうしたのか／てんでに」各自に／どじこく「駄々を捏ねる／じきに」直ぐに／ののさま「仏様／まめつてえ」健康／まつべる「面倒を見る／もうらしい」かわいそう／むさい「汚い／みぐさい」見苦しい／わにる「恥づかしがる／やつくら」わざと／せんぜる「人に物を上げる／かんます」掻き回す／ようにと「ゆつくりと／なから」およそ／よりあう「手伝う／こてされねえ」具合良くてたまらない／しやらさび「凄く寒い／ささらほさら」めっちゃくちや／じよける「ふざける

(千成 宮本 定雄)

6月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

[原稿規定] 字数 650字(13字×50行)以内。ワープロによる原稿(縦書き)でも結構です。

内容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館 (第2・第4月曜日は休館日です)

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuou/index.htm>

わくら道

昨年だったと思うが、第十回世界洋菓子コンクールがフランスで開催されました。コンクールには、各国を代表する菓子職人が三人一組で十二チーム参加し、十時間で各種の洋菓子を作り、その美しさと味を競い合うものです。最後の片付けまでも審査対象になっており、気の抜けない勝負だそうです。

優勝は何処の国の人が食べても美味しいと思う洋菓子を目指し、黄粉と黒糖などで組み立てたデザートで勝負した日本代表でした。チーフは「菓子作りは先ず衛生面が大切なのです。普段の仕事の延長線上に、優勝があっただけなのです」と話していました。普段の地道な仕事や努力こそが、すばらしい結果につながることを、この菓子職人さん達が教えてくれたのではないのでしょうか。

あがとき



さわやかな緑の風を満喫している内に、もう雨の季節に入ろうとしています。今年の気候は不順なことも多く、環境の悪化が懸念されます。

今月も多くの投稿を頂き、掲載する四編を選ぶ難しさを感じています。季節に触れた作品が時節を失することもあり、申し訳なく思っています。年齢を重ねるごとに、健康

の大切さを感じています。健康も色々あるでしょうが、自分に合った方法を見つけたいものです。君が代も小学生の頃に『岩音鳴りて』と意味も判らずに唱っていたのを思い出しました。南画の主題などにも使われる太公望ですが、大物を釣り上げる文王になりたいたいですね。ふる里の訛なつかし「エッ」と言うような意味の方言も楽しいですね。これからも沢山の投稿お待ちしております。

(田中)